

## 2021 年春 丹沢フォーラム～丹沢自然再生 いま、丹沢に必要なこと（渓流域の森林環境—自然再生の現地を訪ねる）～

- 主 催 NPO 法人 丹沢自然保護協会  
共 催 丹沢の緑を育む集い、丹沢大山自然再生委員会  
協 賛 サントリーホールディングス株式会社  
協 力 神奈川県自然環境保全センター、札掛森の家

令和3年4月18日（日）にNPO法人 丹沢自然保護協会の主催により「春の丹沢フォーラム」が開催されました。前日は雨天でしたが当日は春の好天に恵まれ、午前中は室内講義を聞き、午後は林道を歩きながら渓流域の自然再生の現地を訪れました。

室内講義は札掛森の家を会場にして、自然環境保全センターの田村氏と永田氏のお話を聞きました。田村氏からは「溪畔林再生の現状と課題」というテーマで、県内の森林植生の概況や溪畔林の重要性、県の水源地施策として平成19年度から26年度までに行われた溪畔林整備事業の紹介と、モニタリングの結果についての報告を聞きました。

次に、永田氏からは最初に現地周辺に生息している哺乳類の紹介がありました。センサーカメラに映っていた動物たちです。ウサギやカモシカも生息しているとのこと。ツキノワグマの動画が流れると多くの参加者から感動の声が上がりました。

続く本題は「森と鹿と人が共存するために」というテーマのお話でした。シカの生態にはじまって、県内におけるシカの分布変遷やシカ問題の経緯、人による森林の利用の歴史についての説明を受けました。



発表状況



質疑応答

昼食後には、マイクロバスに分乗して境沢林道のゲートまで移動して、そこから徒歩で林道終点まで歩きながら、モミ林やシカの管理事業、そして溪畔林とその植物についての説明を受けました。



奥に見えるモミ林の説明



柵の内外の差異と管理捕獲について説明

モミ林はこの境沢流域の標高帯における自然植生であり、多くの生き物が生息する重要な森林であることを知りました。

シカの管理捕獲については、スギ林下に設置された植生保護柵の内外の差を見ながら説明を受けました。シカの管理捕獲によって現地ではシカ密度が5頭/km<sup>2</sup>未満に低下してきましたが、想定どおりには柵外で下層植生は増えていないようです。シカは本来平野部から里地の動物であるため、進化の歴史の中で奥山の森林植物と共存する関係を築いてきておらず、森林の中でシカが生息することは両者にとって現時点では不安定であり、将来安定する可否はいまだわからないという説明でした。



溪畔林整備事業の説明※



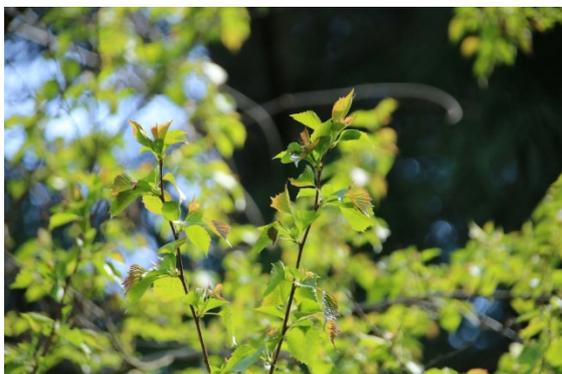
間伐と植生保護柵の設置を組み合わせた場所

※

溪畔林の説明では、沢沿いに植えられたスギ林を対象にして間伐や植生保護柵を設置し

て、広葉樹を自然に生やし、広葉樹との混交林化や将来的には広葉樹の溪畔林にしていくのが溪畔林整備の方法であるとの説明を受けました。柵内には様々な広葉樹の若木が生育していることを確認できました。また、現地には溪畔林構成種の一つフサザクラが生育しており、幹まわりからたくさんのヒコバエを生やす特徴を実見しました。この場所での溪畔林整備は平成28年度に終了しましたが、溪畔林整備の考え方は水源の森林づくりでの配慮事項に活用されているようです。

最後に、広葉樹の溪畔林下に設置された植生保護柵に案内され、その柵内には貴重なコチャルメルソウやキクザキイチゲなどの草花がありました。柵外においても見られるようになってきているとのことで、管理捕獲の効果も少しずつ表れてきていると感じました。



溪畔林構成種の一つフサザクラ※



溪畔林の柵内に生育するコチャルメルソウ※

参加者の皆さんからは、「丹沢にたくさんある柵の設置理由がこれまで不明であったが、今日の話聞いて理解できた。」「今日のような研修を動画にしてホームページに載せてほしい!」「溪畔林整備やシカの管理捕獲をぜひ継続してほしい!」など、丹沢大山の自然再生に重要な多くの意見と提案をいただきました。

札掛森の家に戻ってからの総括では、丹沢大山自然再生委員会の委員であり元東京農工大学特任教授でもある羽澄先生から、「他県と比較して神奈川県は事業は県民に対して丁寧に説明して行われていると思う。しかし、今日のような場においても県民の声を届けることは重要である。今後もこのような機会を大事にしてほしい。」という意見をいただいて、フォーラムは終了しました。

(注) ※を記した写真は丹沢自然保護協会の長澤展子さんに提供していただいたものです。